

Ed.ベンだより



〒242-0007 大和市中心林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107

電話 / Fax 046-272-8980 Email: toiawase@edventure.jp URL <http://edventure.jp/>

うめき声が聞こえてくる……

世界では毎日毎日大変な出来事が起きている。イギリスのEUからの離脱、世界いたるところでの排他的なナショナリズムへの熱狂、テロにいたっては、戦火から遠いと思われる国々で、IS国の身分が殺戮を引き起こしている。バングラディッシュでは、日本人も犠牲となった。近い未来、様々な混乱的出来事が続く「今」を、歴史的にはどう語られることになるのだろうか。

事件は様々で、しかも世界のいたるところで起きている。しかし、それらが何か共通の性格を持っているように感じられて仕方がない。思い過ごしだろうか。

歴史社会学者の小熊英二氏が、5月26日の朝日新聞「論壇時評」で、「二つの国民 所属なき人」という言葉を使っている。氏が言うには、現代日本は「二つの国民」に分断されている。「第一の国民」は、企業・官庁・労組・町内会・婦人会・業界団体などの「正社員」「正会員」とその家族である。「第二の国民」は、それらの組織に所属していない「非正規」の人々だ、という。それは、満足できるレベルでの社会参加と保障から取り残された人々である。しかも第二の国民は、「周辺の正社員」も含みこみつつ、急激に増えていると指摘している。「第二の国民」たちは、低収入から将来への希望も持てず、結婚もできない。生涯未婚者は、2035年には、男性で3人に1人、女性で5人に1人になるという。小熊氏は、「放置された『第二の国民』の声は、どのように政治につながるのか。誰がかれらを代弁するのか。この問題は、日本社会の未来を左右し、政党やメディアの存亡を左右する。これは、この文章を読んでいるあなたにも無縁の話ではない。」と文章を結んでいる。

さて、世界で起きているさまざまな事件の裏側にあるものはなんだろうか。民族的な偏見や対立だろうか。それとも宗教対立？または、経済利益の対立だろうか。まさか冷戦時のイデオロギー的政治体制のぶつかりあいではあるまい。

ここで見えてくるのは、小熊氏が言うところの「第一の国民」と「第二の国民」の衝突としての「事件」である。世界中に広がり、深まりつつある「第一の国民」と「第二の国民」の格差。人権としての社会参加と社会保障から切り離されたたくさんの人々が、大きなうめき声を世界中であげ始めている。そういえば、EU離脱を決定付けたのは、グローバル経済の恩恵を受けない労働者の人々であった。

世界の富裕層62人の財産と、世界人口の下位半分である36億人の財産合計がほぼ等しいということは多くの人が知るところの事実となった。62人まで絞らなくても、世界の上位1%の人々の資産は、他の99%の人々の合計より多いことはもうみんなが知っている。

アメリカの若者と労働者から熱狂的な支持を受けたバーニー・サンダース大統領選候補は、「グローバル経済は、米国でも世界でも、大多数の人々の役に立っていない。経済エリートが得をするように、かれらが生み出した経済モデルだ」と、世界の体制とそれを守る為政者を批判した。

再び振り返って日本。私たち「Ed.ベンチャー」が「弱い存在の子ども達と、子ども達を支える先生方のために」活動を始めたころと比べて、明らかに状況は厳しくなった。中流がどんどん下方に滑り落ち、社会が底上げに向かう可能性は全く感じられない。「貧困」という言葉を為政者が平気で使うとき、憤りすら覚える。いったいその責任は誰にあるのか！貧しくなったものの努力が足りないと言ってもいいのだろうか。それとも、貧困は自然発生的に生まれてきたと思っているのだろうか。もう一度サン

ダース候補の言葉。「たぶん近代史で初めて、いまの若者世代は、親世代より低い水準の生活を送るだろう。」

私たちEd.ベンチャーは、「弱い立場の子ども達」の中に、貧困を背景に様々な困難を抱える子ども達もはっきり対象とすることを確認しなければならない。誰がかれらの言葉を代弁するのか、そしてそのことは、私たちと無縁のことではない、という小熊氏の言葉を、私たちは今、どのような気持ちで反芻したらよいのだろうか。

Frend Star教室 始まる！

厚木保健福祉事務所からの委託を受けて、2016年6月15日から、生活保護世帯等の子どもに対する学習支援教室を、愛川町にてスタートさせました。愛川町には、外国にルーツをもつ人たちの割合が多く、その中には、学習や養育の支援を要する子どもたちも含まれています。本委託を受けて、すたんどばいみーのメンバーを中心とした支援グループを作り、厚木保健福祉事務所のスタッフの方とも入念な打ち合わせを経て、教室がスタートしました。

教室の第1回目は、子ども達とスタッフが一緒に、これから学習や活動をともにする教室の名前を決めました。教室の名前はFrend Star。その願いは「星の数ほど友達がほしい」とのこと。その願いに、外国籍の子どもが多く抱える問題の一端を見た気がしました。

現在、教室のコーディネーターは、チューブ サラーンさんです。新しい地での外国人の子ども達との出会いから見えることを、次号では報告してもらおうと考えております。

【お知らせ】外国人の子ども支援のためのボランティア養成講座

8月23・24日、大和市渋谷学習センターで開催します。これから外国人の子ども支援を考えている方、これまで行ってきた支援を振り返りたい方、学校の先生方、どなたでも参加できます。2日間の連続講座の内容と講師は、以下の通りです。

①大和市の外国人の子ども達の実態と外国人支援の仕組み：

大和市立大和小学校校長 大森操氏、大和市国際化協会

②外国人当事者団体の活動から見えてくる外国人支援のあり方：

外国人支援ネットワーク すたんどばいみー 理事 チャンソワンナリット氏

③外国人の子どもたちの学校での学習指導の実態：

大和市内小学校教諭 前田拓郎氏・馬場有希氏、大和市寺子屋コーディネーター 内藤順子氏

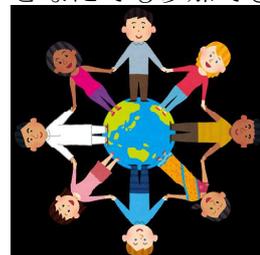
④外国人の子どもたちの言語獲得 日本女子大学 教授 清水睦美氏

⑤子どもの抱える課題の母国による違い 日本女子大学 教授 清水睦美氏

⑥南米出身の子どもたちの抱える課題の特徴 鳥取大学 准教授 児島明氏

⑦アイデンティティ獲得の困難さ 外国人支援ネットワーク すたんどばいみー 理事 西岡歩氏

⑧フリーディスカッション



ご参加お待ちしております！

【理事の独り言】26日未明、相模原の障害者福祉施設やまゆり園でおきた事件には強い衝撃を受けた。弱い存在を標的にし、なおかつ「重度障害者に安楽死」という身勝手きわまりない理屈を正義として振りかざす姿が、どこか今の日本の状況に重なる。まして、衆議院議長宛の手紙を読むと、明らかに政府は自分の考えに同調してくれるはずだという感覚…。そう見られても仕方がないさと思ったりもする。でも気になるのは、犯人の精神的な疾患に、その原因の全てを押しつけそうな報道がなされていることである。弱者が弱者を抑圧するという、「抑圧移譲」が私たちの意識を超えて、進行しているのかもしれない。この事件を報道する新聞の片隅には、中学三年の女子が、祖父を絞殺して自首した記事が小さく載っていた。(MS)